

仕事人秘録

平松氏はソニー内でオーディオ事業本部に異動し、ホームコンピュータ事業に携わった。

1980年代前半、米国ではビデオゲームがはやっていた。ソニーでもホームコンピュータ事業に参入しようということになり、東奔西走したことを懐かしく思い出す。83年に発売したパソコンはわずか8MBの記憶容量しかなかったが、ソニーだけでなく、松下電器産業（現パナソニック）や日立製作所、東芝などと一緒に発売した。

人に恵まれた転職人生 ⑦

元ライブドア社長
平松 庚三氏



趣味の自転車レースで完全燃焼できたことが転職決断を後押し（左が平松氏）

PC「敗退」、引き抜きに悩む

相手はイムニスインタナショナルという外資系調査会社の人だった。万年と名乗った彼は開口一番、「あなたのこととは調べさせて頂きました。是非、アメリカン・エクスプレス（アメックス）の日本法人に推薦したい」という。す

る。当時、花札やゲームウオッチしか作っていなかった任天堂と同じ83年にファミリーコンピュータを発売し、急激に売り上げを伸ばしていたからだ。企業規模から言えば楽に勝てると思われたが、80年代半ばになると、こちらのパソコン事業の形勢が徐々に不利になった。敗色が濃厚になるにつれ、次第にソニーにおける自らの存在意義に疑問を感じるようになっていた。86年1月のある日、自分のデスクに1本の電話がかかってきた。一面識もない男性が「コンピューター市場などの調査をしているの、話を聞きたい」という。東京・虎ノ門にあるホテルオークラのロビーで会うことにした。

ぐにヘッドハンティングだなどピンときた。聞けばアメックスの日本法人で広報と出版事業本部長を兼ねるボジションにふさわしい人物を探しているとのこと。悪い話ではないので、当時アメックスのトップだったジム・ファイアストーンに会いに行った。面談後に自分の気持ちがあつたかもしれないと思っ

たが、なかなか踏ん切りがつかない。振り返ってみれば、ソニーという企業は本当に居心地の良い会社だったからだろう。

同社には妙な派閥もない。相手が社長であれ、自由に意見できる。日本を代表するグローバル企業に勤務しているという世間体もあつたかもしれない。

優柔不断で決断できないまま、5月になった。私は趣味の自転車レースに参加すべく、静岡県にあるヤマハのテストコースにいた。豪雨の中という厳しいレースだったが、私はトップとわずか0・25秒差の8位で初めて入賞を果たした。トップになれなかったのに、言葉では言い表せないような充足感。この感覚が自分の決断を後押しした。